

B・S・T・B・Sで平日夕方に再放送されている『水戸黄門』を見始めてから一年が過ぎました。佐野浅夫さん版終了後、石坂浩二さん版は何故か放送されず、里見浩太郎さんのシリーズに代わって暫くしてから唐突に東野英治郎さんの初代黄門様に戻って3シーズン放送された後、再び里見黄門様になり現在進行中です。

里見黄門様を長らく見た後に初代の東野黄門様を改めて見ると隔世の感があります。何せ四十年の時の流れがあるので当然と言えは然りですが、お馴染みの勸善懲惡物語に慣れた身としては初期のシリーズな展開には戸惑いました。

例えば第三部の最終回で光圀が宿敵柳沢吉保と対峙して、その所業を断罪し隠居に追い込むシーンがあるのですが、もひとつスッキリしないのです。悪役が打ち負かさればカタルシスが生まれるものですが、山形勲さん演ずる吉保が悪あがきせず潔く罪を認め身を引く姿を見ると逆に気の毒な気分になってくるのです。それは何故かなと考えるに、光圀役の東野英治郎さんの頑固な面構えと説教臭い台詞回しが強烈すぎて、落着いて品のある喋りの山形さんの方が良い人に見えるからなんです。情が入って正義が悪を懲らしめる図になっていないので

す。

それに比べると凛々しく優しく穏やかな里見浩太郎さんの光圀が、憎々しい悪人面（失礼）の石橋蓮司さん演じる吉保の悪企みを砕くと、蓮司さんが苦虫を千匹くらい噛み潰したようなしなやかめつ面をして「おのれ光圀め、覚えていろ！」と地団太踏むところを見ると「ざまあみろ！」となってスカッとするわけです。

このドラマを飽きもせず見続けている人は、毎回形は変われどこの「ざまあみろ！」を求めているわけで、初期のシリーズに見られるドラマ性重視の絵面よりも、マンネリと言われながらも大人向けのヒーロー物に徹した痛快時代劇である後期のお話のほうが世相の軽さと合わせて長く続く要因となったでしょう。

それと現在放送中の第四十一部では、今見ると笑ってしまう展開があります。新婚の助さんがご老公と旅に出た後、残された新妻が大好きな夫（助さん）が浮気をする夢を見て心配で居ても立ってもいられず駕籠に乗って追っかけちゃうのです。で、何が可笑しいかというと、この色男の助さんを演じているのが後に4WD不倫騒動を起こした原田龍二さんなんです。けだしハマリ役です。



空き家 25

木幡智恵美

生家の思い出⑩

工場を建てる前、便所の隣の納屋には農作業に使う様々な物が置かれていた。その中に養蚕に関する物もあり、ひとまずは工場の一隅に保管してあった。天井がはられ、祖母も養蚕はすっかり辞めてしまったので、関連する道具一切処分することにしたのは、私が高校二年生の時だった。その中には糸巻や糸車もあった。「うわあ」と言って、糸車を回す私の様子を見て、祖母は、「どっこいしょ」と腰をあげると、古い筆筒の中から一着の着物を持ってきた。傍にいた母が、「紐落としての時の着物だがね」と言う。祖母は、「ここで育てた蚕の糸を繰って、染に出して、機織りしてもらって、それで着物に仕立ててもらったわな」と目を細める。つまり、祖母が育てた蚕の繭を使った、すべて手作りの代物だったのだ。

田舎に帰り、この家に住まうようになって初めてこの家の重みを感じた瞬間だった。祖母は、一人残されたこの家で、生計を立てるために養蚕をはじめ、最盛期には庭に集荷場まで建て、地方巡業の役者の宿舎にこの家を使った。家を支える太い大黒柱さながらの生き方を貫いた祖母の魂がこもった着物。思わずその着物に頬ずりをした。

私を通った高校には「たまもひ」という冊子があり、そこには詩、俳句、短歌、古文や漢文の一節などが収められていた。それを少しずつ暗唱し、先生の前で言って合格すると次に進み、最終的には冊子すべてを暗記する。暗記が大の苦手の私は、なかなか先に進めない。本一冊を読み終えたこともない私のもう一つ苦手なのが、年に一度提出させられる主情文だ。暗記と読書に加え、作文が大嫌いだったのに、この着物のことを書き出すと、面白いように筆が走り、一気に書き上げた。主情文は、提出後に先生が読んで、何かをまとめて冊子にする。その文集に私の載ったのには驚いた。「文章は稚拙だが、思いが溢れている」というような評だった。やろうと思えばできるではないか。何だか力が沸いてきた。

高校の授業に付いて行けず就職する気だった私は、三年生を前に漸く将来を考えるようになった。今からでも遅くない。小学校時代に憧れていた教師になろう。そのためには進学しなくてはならない。絹の着物が、霞んでいた未来に一筋の道を示してくれたのだ。

担

任をしている間、ずっと続けていた唯一のことが日記を書かせることだった。それは、自分が小学生のころに書かされたからだ。書くことを思いつかず嫌になるときもあつたが、逆におもしろくてしかたないときもあつた。総じて、一日の終わりにその時その時思い浮かぶことを書くというのは、自分の中で良い作用を及ぼした気がするので、子どもたちにも求めた。

子どもたちの日記の中から、生き生きしたものを、考えさせられるもの、感情を揺り動かされるもの、ユーモアのあるものは、それだけをまとめて構成し、プリントして配布した。「詞花集」とか「えんぴつの花」とかタイトルをつけて、多いときには年間で百号を越えた。

学級の人数分よりかなり多く印刷していたが、それは職員の中に自分も読みたいと言ってくれる人がいたからだ。配ると子どもたちは黙ってにやにやしながら読んでいたが、職員も同じ顔で読んでいた。その顔を見るのがいつも楽しみだった。

学級の子どもたち以外にも楽しみに読んでくれる人がいるのだから、と思いついたのが夕焼け通信の読者に通信といっしょに送ることだった。喜ぶべきかどうかかわからないが、読者の反応は子どもたちの日記

の方がはるかに多かった。夕焼け通信をおもしろいと言ってくれる人はめつたにいないが、子どもの日記はたくさんいた。

あるとき、京都の上島聖好さんが電話をかけてきて、
「宮森さん、あなたすごく大事な仕事をしているのよ」

と言った。上島さんは、ぼくが子どもたちの日記をおまけで同封しているぐらいに軽くしか考えていないことを見抜いていて、あなたが思う以上に値打ちがあるのだと論してくれた。子どもたちの紡ぐことばを求めている人たちがいることをぼくはそのときようやく考え始めた。

高尾小学校で落語を始めたとき、ぼくはやはり軽く考えていた。地域の人たちを学校に呼び込むのに落語のおもしろさは使える、というぐらいの軽さだ。考え尽くしてから物事を始めるなどとても根気が続かないし、とにかく始めてみて考えるのはそれから、というのが性に合っているのしかたがない。

子どもたちの落語に話芸としての価値をみようとすると足りないところだらけかもしれない。これま

でかなりのレベルに達した子もいるにはいるが、それ
ラックスして語ってみせ、さつきまで舞台であったことつを囲んで、みかんやお菓子におおはしやぎでばくついた。それをにこにこして眺めながら、
「寿命が延びましたわ。」

と老人は言った。子どもものにぎやかな声を全身に浴びると薬効あり、とでも言わんばかりに。

子どもたちの声を毎日当たり前に聞く職業だったぼくにはまるでわかつていかなかったが、子どもたちの声を聞きたくても聞けない家や地域が、いくらでもある。自覚するにせよ、無自覚であるにせよ、大人ことに高齢者は、子どもたちの声を浴びたいという欲求が体の中にあるからこそ、せつせとにこにこ寄席に通つてくるのではないか。ぼくにはそう思えるのだ。

松江算数活塾で落語教室をやらないかと誘われたとき、ひよつとして教室生が現れたなら、子どもたちの声を求める人たちに届けられるのではないかと、と思った。表現力や想像力を伸ばす、などと大義名分は掲げるけれど、ぼくの動機の本心はそこじやあない。求める人がどこかで待っている気がするのだ。

落語教室生が2名になった。りっぱに寄席ができる。子どもたちを呼びたいと思われる方、どうぞご連絡ください。子どもたちの成長をいっしょに見守ってください。

これはその子が何かしらの力に恵まれているからで、全員に求められるものでは決してない。実力としてはかなりのでこぼこがあるにもかかわらず、高尾小にこにこ寄席に足を運ぶお客さんは、にこにこ寄席の全体を楽しんでくれている。上手い子をひいきにするという感覚はまったくなく、巧拙関係なしに子どもたちの有り様を楽しんでいるように見えるのだ。一年また一年と重ねるごとにそれを強く感じるようになったし、子どもたちもそれを肌で感じているからこそ、誰一人嫌がる者もおらず今日まで続いているのだと思う。

高尾小を去って、少し距離を置いたとき、子ども落語と上島さんの言葉が重なった。お客さんが求めているのは、巧拙という意味の世界ではなく、子どもたちの声そのものなのではないか、と思つたのである。

今も忘れられないにこにこ寄席の一席がある。落語を聞きたくても足が痛くて学校に出かけられない、という地域のあるお年寄りのことを聞いた。

「ならばこちらから出かけよう」と言ったら、子どもたちも大乗気になった。一般の民家、舞台はこたつ、お客さんはその声を寄せてくれた老人と、ご近所の人たち五人ばかり。子どもたちはいつもより